学校だより

磨光

令和６年９月１８日（水）
三豊市立本山小学校
No.１０
発行者：中田　祐二

ある方が言っていました。近年、学生に質問すると「〇〇ですか？」と聞き返してくる。「違います」と言うと、臆することなく、先ほどとは全く違った答えを返してくる。それはあたかも、三択クイズに答えるかのようだと。

本当の学びとは、問いについて、時間をかけて、別の可能性はないか、もっとよいものがあるのではないかと吟味し、迷いながらも少しずつ自分の答えを深めていくものなのでしょう。

難しい話ではありません。子どもたちの中にも、お手本はあります。

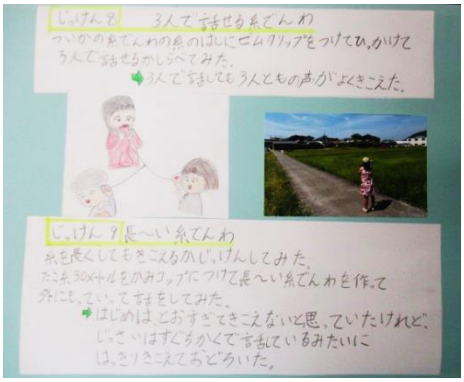
尽きぬ興味と憧れを味方に

前回の「磨光」で、夏休みの読書感想文の紹介をしました。今回は二つの自由研究を紹介します。

一つは、２年生の「糸でんわのじっけん」です。

この児童は、最初は「糸電話の糸の種類を変えたらどうなるんだろう」と疑問をもち、毛糸・たこ糸・ビニールひもなど、いろいろなひもで実験してみました。

でも、やればやるほど知りたいことは広がります。「紙コップの代わりにラーメンのカップだったら？」「牛乳パックだったら？」と、次は受話器部分の素材に着目します。そして最後には「３人で話せる糸電話は作れるかな？」という豊かな発想や、「糸を長く、30 メートルにしたらどうなるかな？」という壮大な計画に移っていきます。学びに終わりはありません。

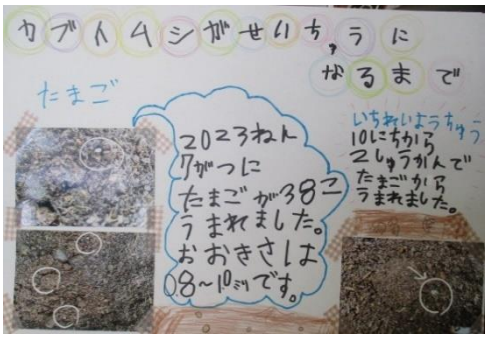


【「糸でんわのじっけん」（２年生）から】

もう一つは、１年生の「カブトムシ」です。

この自由研究を初めて目にした時、「あれ？」と思いました。自由研究の始まりが 2023 年、去年です。幼稚園の時からこの自由研究を始めたことになります。職員室でもそのことが話題となり、私たちも自由研究のごとく「研究仮説」を立てました。

> この子の家の近くには、３年生のＳさんが住んでいる。Ｓさんは去年、自由研究でカブトムシの研究をしていた。もしかするとそれを見ていたこの子は、自分もカブトムシの研究をしたくなったのではないか。



【「カブトムシ」（１年生）から】

果たして、この研究仮説は、当たっていました。この児童の自由研究には、Ｓさんが大きな影響を与えていました。上級生が頑張っているのを見て、あるいは友達が頑張っているのを見て、自分も頑張ってみたくなる。とても素晴らしいことです。

今月、閉幕したパリ・パラリンピックで車いすテニス男子シングルスを制した小田凱人選手は、国枝慎吾選手に憧れ、その背中を追いながら実力をつけてきたそうです。そして、次は、小田選手自らが「子どもたちのヒーローになる」と。憧れは伝播されます。

> **「すぐに解決できなくても、なんとか持ちこたえていける。それは実は能力のひとつなんだよ。」**
> **（帚木蓬生、『ネガティブ・ケイパビリティ　答えの出ない事態に耐える力』より）**

解決困難な問いでも、尽きぬ興味があれば頑張れます。憧れの人がいれば頑張れます。